

瓔珞みがく

(大正九年桜星会歌)

佐藤一雄君 作歌
置塩奇君 作曲

一

瓔珞みがく石狩の
みなもととほ
源遠く訪ひくれば
原始の森は闇くして
雪解の泉玉と湧く

二

浜茄子紅き磯辺にも
鈴蘭薫る谷間にも
愛奴の姿薄れゆく
蝦夷の昔を懐ふかな

三

今円山の桜花
歴史は旧りて四十年
吾が学び舎の先人が
建てし功はいや栄ゆ

四

その絢爛の花霞
憧憬れ集ふ四百の
健児が希望深ければ
北斗に強き黙示あり

五

醜雲消えて人の世に
陽光はうららかに輝けど
風の名残のつきやらで
狂瀾さわぐ今し今

六

潮に暮るる西の空
月も凍らむシベリアの
吾が皇軍を思ひては
猛けき心の躍らずや

七

白銀狂ふ埋れ路も
踏み拓かむわが前途
はろけき牧場に嘯けば
雲影はやし草の波

八

想を秘めし若人が
唇かたくほほゑみつ
仰げば高く聳え立つ
羊蹄山に雪潔し